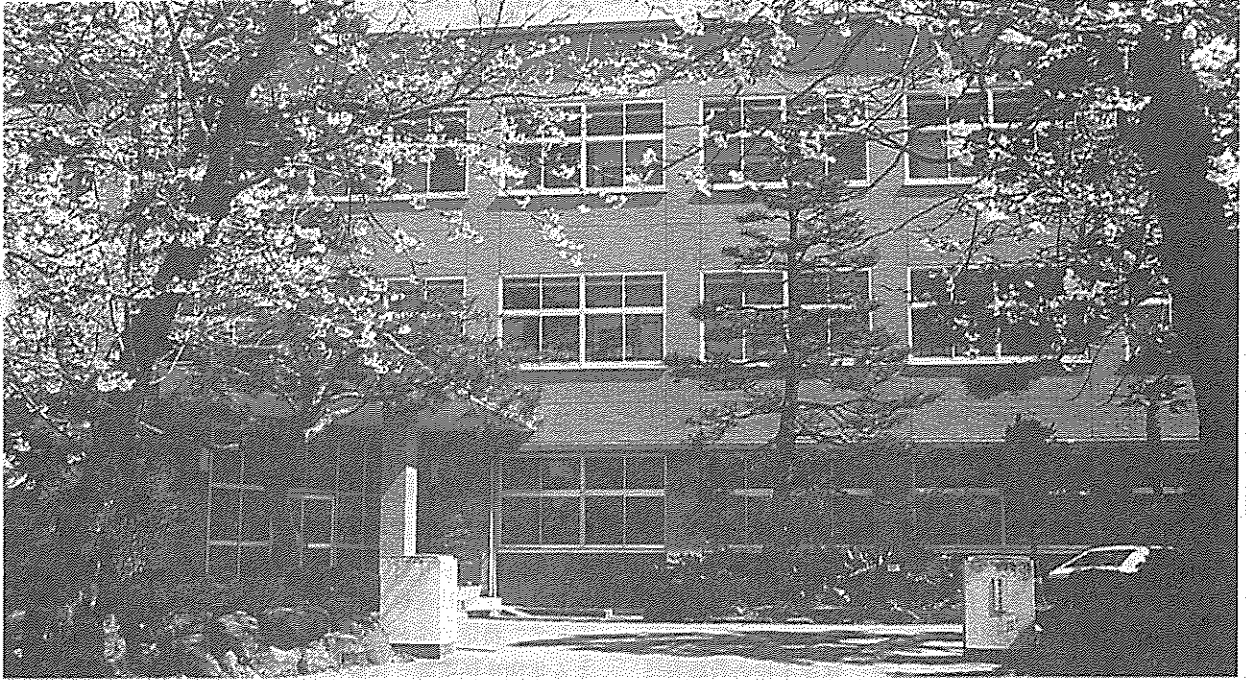


# 同窓会会報

第40号

平成4年8月23日発行

富山県立上市高等学校



## 同窓会の発展を望む

同窓会長 藤原平蔵

同窓会員の皆さん、健康で豊かな生活のなかで立派に活躍されていることをおよろこびいたします。

母校上市高等学校も、校長初め教職員一丸となって生徒の育成に努力され成果を挙げていらっしゃることに深く敬意を表します。

特に平成6年には、全国高等学校総合体育大会を、平成12年には国民体育大会（2000年国体）が富山県で開催されます。県民は出場選手の優秀さと、より立派な会場での大会を願いつつ、健闘を祈って居ります。

同窓会は、大正13年3月に第1回卒業生59名が入会し、昭和20年8月15日第二次世界大戦が終戦となりました。昭和23年4月の学制改革で、学校の統廃合、通学区の変更、男女共学等によって現在の富山県立上市高等学校になりました。

以来70年の年月を経た平成4年3月6日に新会員325名が入会され、17,987名の強力な上市高等学校同窓会となりました。

なお同窓会支部が県内、県外で間もなく10支部にのぼるとし、同窓会の発展を意味するものであります。

いまや国際化の時代であります。日本は経済大国となり、又世界第一の長寿の国となりました。

一方環境問題、地球の温暖化から選り回数曜日ノーカーデー、太陽電池のクリーンエネルギーの実用化、年間の勤務時間を1,800時間に短縮するなど問題山積の多忙な今日であります。この激しい変化の中に、更に各方面にわたって多様化・高度化を叫ばれています。

会員の皆さんには、あくまでも健康で活躍されることを祈ります。



## 学社連携に独自の展開を（再掲）

— 学校5日制の流れの中で —

学校長 福島 功

会員各位には益々御健勝にて御活躍のこととお慶び申し上げます。

平素より母校の発展と充実に暖かい御支援を賜わり、厚く御礼を申し上げます。

さて、国際化、情報化、高齢化に象徴される社会の急激な変化は、生徒を取り巻く教育環境に著しい変化をもたらし、さらに、豊かさに伴う社会状況の変化や価値観の多様化は、生徒の意識や行動に深くかかわり、概して個としての確立がおくれているように思われます。

生徒の興味、関心、能力の多様化という側面からも、教育の学校完結主義を見直して基礎、基本の重視と個性の尊重を求め、生涯学習体系への基盤づくりが緊急課題として進められていく中であって、私達本校の教職員は学習指導、進路指導、生徒指導、特別活動の四領域から生徒一人一人の心に迫って、健全育成を図ることに努めております。

目指すところは、将来個人として自立し、創造性に富み、社会連帯意識をもち、国際感覚を身につけ、生きがいを求めて主体的に行動できる若者の育成にあります。遅々たるものではありますが、それぞれの領域において光明を見出しつつあります。

ところで、このような資質の育成について明言できることは、本来生徒は学校、家庭、地域社会のそれぞれにおいて、望ましい学習体験を重ねながら発達課題を修め

ていくのであり、そのそれぞれに特質があり、生徒の人間形成にかかわる役割もまた異なっているということでもあります。

一方、現実には、諸々の事情による家庭教育力の低下や、生徒在住地の広域化と地域社会における人々の連帯意識の希薄化による教育機能の低下など、好ましくない傾向を見聞いたします。三者それぞれが教育機能を発揮しながら連携し、相互に補完的な役割を果たすという総合的な視点からの構想を再構築することの緊急性を痛感いたします。

とりわけ学社連携について、その境界線上の教育活動として、特定の学習活動を深めるための施設等の利用による集団生活訓練、体験学習等や奉仕活動、又全体的、調和的発達のための自然や文化とのふれ合い等の一般的構図とは別に、より小さな、しかしより強靱な生涯共同体とでもいうべき「同窓」を基盤とした小地域的連帯を社会教育の場に据え、人としての在り方生き方について、在校生へ有言無言の叱咤激励が注がれる機能に、将来に向かっての本校の確実なあゆみを予見いたします。

歴史と伝統の中に培われてきた「勤勞、自治、向上」の精神が、不易と流行に心しながら、不透明な21世紀に向かって脈々と流れつづけていくことを祈念してやみませ



## ◇◇◇思い出◇◇◇

### 卒業40年

#### “ハングリーな高校生活が 人生の支えに”

昭和21年春、その時はまだ新しい中学制度が出来ていなかったのは私には田舎のま、農学校へ入学した。そして3年生の時に学区制が敷かれ、2学期と3学期は滑川高校の併設中学へ編入した。そして併中卒業後、改めて上市高校農業科へ入学したのである。だから、私は滑川高校の卒業生名簿にも載っているし、上市高校の卒業生でもある。しかし、私と同世代の人達で同窓生の名簿に載っていない人達が居るのでないかと思っている。それは学区制が敷かれた時、別の学校へ編入するのが嫌で学校をやめてしまった人達である。6・3・3制という新しい制度になり、中学校3年までは義務教育だから、その地域の学校に入らなければならないという考え方について行けなかったのかも知れない。

終戦直後は、日本中がそうであった様に学校の教育現場でも大変な物不足であった。教科書は学期毎に、ホッチキス止めを買った。1年生の時だったと思うが、図画の時間に西洋紙の半切りにしたのを配り鉛筆で写生をしながらということがあった。紙もザラ紙で破れやすい、

### 卒業30年

#### “清き上市川に馳る思い”

卒業して30年、母校の思い出はかぎりなく美しい。入学式の桜の花の美しさ、空の青さをまばゆく感じただに脳裏に焼ついている。家が学校に近く、夏になると上市川の美しい流れに銀

上市高校農業科 第4回（昭和27年3月卒）

#### 小幡 忠 義

鉛筆もHBで「カタイ」ものなら、消しゴムも「カタイ」で消えにくいものであったから、まともな絵に仕上げるはずがない。先生もそれを納得してか、余り文句もつけなかったと記憶している。

農学校と云えば「三本杉」と思う位、三杉公園と学校は一体の様に皆んなが考えていた。昼の時間に寝ころんだり、いやな時はそっとかくれていたこともあったりで自分の家の家庭の様な気持で公園と付き合っていたと思っている。その公園の見方を変えれば、農学校のシンボルの様な存在であった「三本杉」がなくなってしまったことは残念であるし、一抹の淋しさを感じずにはいられない。

この58年間私は自分だけの人生を淡々と生きて来た。然し全く孤独に生きたわけではない。ほかの人とのめぐり合いと、ほかの人の心への深いふれ合いとによって、刺激を得、はげまされなくさめられて来た、と思っている。そうした中で最も多くのことを感じ、学び、考えさせられたのは、物不足に悩み、苦しみながら学生生活を送った、上市での時代であったと思っている。

上市高校普通科 第13回（昭和36年3月卒）

#### 鍛 治 義 明

色の鮎の姿を追い、食糧難時代夜おそくまで鮎とりにくっていた。

現在のように明い照明もなく、目をならしながら、河原にいた。

どこの家庭も、鮎取りには夜遊びも許し、ガキ集団で行動する時代であった。

此処15年間、毎年あちこち鮎を食べ歩いている。又鮎好きが知れ、毎年季節には頂戴する。

食糧不足が私に鮎の味を教えてくれ、鮎が私に食べてもらいたくて、鮎の方から来てくれると思っている。鮎のたべれない人は気の毒である。

おかげで、グルメを求めて旅行出来るのも、食糧不足の青春時代があったからと感謝している。

そんな事もあって、グルメ番組のテレビ収録も二度も経験させていただいた。

映画とおなじで30分番組なのに7時間かけての食事、味も香りもわからない、主役は料理、これも青春の延長線などとおもっている。

昔は、鮎の旬は、6月10日頃～8月10日頃と、2ヶ月ほど続いた。ところが、近年は、5月10日頃～7月10日頃と、2ヶ月ほど短縮された。

「卒業20年」

## “幾多の難問の中で日頃思うこと”

卒業して早20年。長いようで短い20年。あっというまの20年。その20年を振りかえて見た。

私達は昭和47年高度成長期に卒業した(48年まで続く)。その後日本は列島改造景気、物価急上昇、第一次オイルショックと変化した。国際収支の大幅黒字、円高による円高不況、それが深刻化し、株と土地の高騰に伴い、資産効果による、大型乗用車や輸入車の大衆化、そして大型テレビ、VTR、エレクトロニクス革命(パソコン・マイコンないしファミコン)ワープロ、ファクシミリ、コピー機、AV機器、カメラ、楽器等々の技術の目覚ましさと普及に目を見張るものがある。やがてバブルの破裂が取りざたされるに至り、金融業界の不祥事が相次ぎ、株価の低迷、設備投資の激減、労働力不足など景気の大

研修、観光で10ヵ国以上旅行させて頂いたが未だにふるさと富山の水がおいしく、無料で飲める園に相い当たらない。インドネシアの山中に豊富な湧き水を見にいったが、こわくて呑めなかった。

どこに出かけても、上市川の伏流水の味が身体のどこかにのこっている。

最近のゴミの山、汚染問題、フロンガス等環境保全が叫ばれるなか、児童を始め各団体がゴミ、あきかんを集め、社会奉仕をしなければならない時代、上市川のよごれが特に気になる。

裸足で遊び甕子で何度も傷をし、筏では川に落ちたが、怪我もなく今日あるのは、水が一番清潔で雑菌を流してくれたと今でも信じている。

昔は、鮎の旬は、6月10日頃～8月10日頃と、2ヶ月ほど続いた。ところが、近年は、5月10日頃～7月10日頃と、2ヶ月ほど短縮された。

上市高校農林工学科 第24回(昭和47年3月卒)

## 越本好信

彼が満ちている。前途にマイナス要因が少なくない。平成景気が鈍化し、経済の衰退に向っている兆候である。では、農業はどうか。輸入の自由化が牛肉・オレンジに始まり数多くの品々があげられている。その上、ウルグアイランド交渉は結果まちで米の市場開放、貿易摩擦を原因とする農産物輸入の外圧が続く国内の農業は、農家戸数・農家人口の減少、高令化、農家・農業労働力の減少が続き深刻である。でも一方で、大規模層の増加、耕地の貸借で進展、作業受委託の拡大等が進んでいる。組織活動等を通じて、もっともっと押し進めていきたい。農業は、人類にとって人間生活に欠く事の出来ない仕事である。農産物の生産は有意義な産業として、胸をはって従事してくれる若者が育ちますように祈り筆を置く。

## “十年組幹事の思い”

山崎宗良

卒業して10年もたつと、もう2-3人の子供のある者もいるし、職場や地域の中でもそれなりに果たす責任も増えてくる。そんな中で各クラスの幹事さんには大変ご無理を言って手間暇のかかる仕事を引き受けてもらった。中には当日参加できないにもかかわらず、引き受けてあげようと言う暖かい言葉をいただいた方も何人かいらっしゃいます。とても嬉しく思いました。感謝致します。また我々のために微細にわたりご援助してくださった先生方、本当にありがとうございました。

そんなこんなで幹事の皆さんと手分けをしながら連絡をとってゆくと、そこでは同窓の皆さんの生活の舞台裏が見えて来る。電話の奥から子供の泣き声があったり、どこかへ遊びに行つてつかまらない奴、そしてなによりも多かったのが夜遅くまで仕事をしていてつかまらない人。そんな友人の頑張りをみると私自身も励まされるような

思いがする。みんな少しずつ荷物をしょって自分に力と深みのある色をつけて行くのだと勝手に美化して想像してしまう。でもいざ友に会ってみれば皆そんなそぶりは少しも見せずに、10年前と同じ顔で肩をたたいたりニヤッと笑ったりするだろうと思ってしまう。私は高校時代と言えどもさして華やかな思い出があるわけではないが、幹事の仕事をしながら、高校生だった時の懐かしい感覚が少しずつ自分の中によみがえってくるような気がするのである。ピンボーくじを引いたとブツブツ文句を言いながらもなぜか当日が楽しみになってくるのである。そしてまた10年、20年後とみんなで酒が飲めればいいなあと思っています。

それでは10年組の皆様と共に我々の今後の健勝と幸多きをお祈りして終わりと致します。

